

令和 5（2023）年度
総合型選抜（経済学部） 試験問題

小論文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないで下さい。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入して下さい。
- 3 解答には鉛筆かシャープペンシルを使用して下さい。
- 4 問題は全部で4ページあります。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 試験終了後、問題冊子も回収します。
- 7 何か伝えたいことがあるときは挙手して下さい。

問題

以下は広井良典（2019）『人口減少社会のデザイン』の一部を抜粋している。ここでは、少子高齢化の進行が著しい日本において「2050 年、日本は持続可能か？」という問いに対して、重要なし象徴的な事柄として挙げられている「コミュニティないし「つながり」に関する持続可能性」について議論している。以下の文章を読み、設問 1～3 に答えなさい。

コミュニティという“あいまい”な存在

コミュニティとは、ある意味で非常に“あいまい”な存在と言えるだろう。それは次のような意味においてである。

やや理念的な話となるが、近代という時代の枠組みでは、社会ないし世界は、独立した「個人」（あるいは「個体」）から成り立つものと考えられ、経済的な文脈では、個人は市場において互いに自由に競争し、利潤の最大化を図ることが想定されている。そして、そこで生じる格差の拡大とか、環境破壊といった問題については、「政府」という公的部門をつくって、それがそれらの問題の是正や調整を行うものとされる。

これが近代的な人間観ないし社会観の基本にある思考枠組みであり、それはいわば「個人」と「社会」、あるいは“私”（プライベート）と“公”（パブリック）、ないし「市場」と「政府」の二元論であって、そこには「コミュニティ」という概念や要素は登場しない。つまり“コミュニティという存在を前提とせずとも人間の社会は成り立つし（むしろそのほうが望ましく）、また人間や社会の理解は可能である”というのが近代的なパラダイムだった。

ところが、近年に至り、様々な背景から、そうした「個人—社会」、「私—公」、「市場—政府」といった二元論的枠組みでは、現在生じている種々の問題の解決はどこか根本的に不可能なのではないか、あるいはそもそも人間という存在の理解が十分にできないのではないかという疑問が提出されるようになり、そこで浮上してきたのが、他ならぬ「コミュニティ」という存在——“公—私”に関して言えば“共”という第三の領域ないし関係性——であるととらえることができる。

（中略）

日本社会とコミュニティ

以上、コミュニティをめぐるやや理念的な議論をまず行ったが、これからの人口減少社会におけるコミュニティというテーマを考えていくにあたり、どうしても避けて通れないのが、日本社会あるいは日本人と「コミュニティ」に関する話題である。

私はコミュニティには「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」という異質な二者があり、かつ両者は人間にとっていずれも本質的で補完的なものと考えている。ここで言う「農村型コミュニティ」とは、集団の中に個人が埋め込まれるようなコミュニティのありようであり、そのつながりは“情緒的な一体感”をベースとするもので、強固な結束性をもつ一方、外部に対して排他的な側面をもっている。それに対して「都市型コミュニティ」とは、

あくまで個人が独立しながら、そうした個人同士がゆるくつながるようなコミュニティのありようであり、そのつながりは理念の共有や公共意識といったものをベースとするものである。

この場合、日本との関係で言えば、日本社会あるいは日本人の関係性が「農村型コミュニティ」に傾斜しがちであり、そのことが「ウチとソト」の明確な区別や、「同調」と「排除」の二極化」といった性向として現れやすいことは確かである。

比喩的な言い方となるが、それは“稲作の遺伝子”とも呼ぶべき、2000 年に及ぶ稲作を中心とした社会構造の中で培われてきた、人と人との関係のあり方や行動様式に由来するものと言えるだろう（広井 [2009b]、[2011] 参照）。

この点は、本書のイントロダクションでも言及した、先進諸国の中で現在の日本がもっとも「社会的孤立」度が高いという現状にもつながっている。ここでの「社会的孤立」は、家族などの集団を超えたつながりや交流がどのくらいあるかに関する度合いを指しているわけだが、まさにそうした“集団を超えた個人と個人のつながり”の構築という点が、今の日本社会における様々な課題の根っこに存在しているだろう。

（中略）

このような傾向の強い日本社会での人と人との関係性を、いかに（集団の）ソトに向かって開かれたものにしていくか——それはまさに先ほどの「都市型コミュニティ」の確立ということと重なる——が、もっとも基本的な課題としてあるだろう。

言い換えれば、現在の日本社会は大きな“関係性の組み換え”の時代にある。つまり、ここで述べているような人と人との関係性のありようは、“国民性”といった不変の属性などではなく、先ほど述べた“稲作の遺伝子”という理解がそうであるように、その時代の生産構造や社会構造に適応すべく「進化」していくものだ。日本の場合、戦後においては農村から都市への人口の大移動が起こったが、そこでは「カイシャ」と「(核) 家族」という“都市の中のムラ社会”が作られていったので、高度成長期には従来型の（農村型コミュニティ的な）関係性のままでそれなりの好循環を保つことができた。しかし人口減少社会を迎え、カイシャなどの組織が流動化し、かつ家族も多様化して一人暮らし世帯も急増する中で、「集団を超えて個人と個人がつながる」ような関係性をいかに育てていくかが日本社会の最大の課題となっている。

（中略）

「居場所」とまちづくり

さて、コミュニティをめぐる話題を考えていくにあたり、ここで注目してみたい話題として、「居場所」というテーマがある。

この点に関して、日本経済新聞社・産業地域研究所が行ったアンケート調査に興味深い結果が示されている。首都圏に住む 60 歳から 74 歳の男女 1236 人に、退職後の居場所という

ことについて、「あなたは自宅以外で定期的に行く場所がありますか」という質問を行ったものだ（日本経済新聞社・産業地域研究所 [2014]）。その結果は、男女ともに1位が図書館で、これはやや意外にも思うと同時に、少し考えるとなるほどと思えるような結果かもしれない。それ以降は男性と女性で多少違っており、女性はスポーツクラブ、親族の家、友人の家と続くが、印象的であるのは、男性はそれらはさほど多くなく、個別の場所で図書館に次いでいるのが「公園」となっている点である。退職した高齢男性が公園で一人佇んでいるような姿が思わず目に浮かんでしまう。そして、さらによく見ると、リストの一番下の「見つからない／特にない」というのが実は2位となっている。

要するに、現在の日本の都市では、「居場所」と言えるような場所が概して非常に少ないということが示されているのである。関連したことで言えば、日本の病院の待合室が高齢者で込み合うのは、その背景の一つとして“病院の待合室以外に行くところがない”という状況があるからだろう。

居場所というテーマは、ふだんはそれほど意識しない面があるが意外に重要で、これはこの後で述べる「まちづくり」の問題と深く関わっている。戦後の高度成長期を中心に、農村から都市に移った日本人にとっては、他でもなく「カイシャ」と「核家族」が居場所の中心であり、男性にとってはとりわけカイシャの存在が大きかったわけである。それが高齢社会となり、退職してカイシャを離れる層が増えていき、また、雇用自体が非常に流動化している中で、若い世代や子どもを含めて、新たな「居場所」を模索しているのが現在の日本社会あるいは日本人ではないか。こうした把握を踏まえて、まちや都市の空間のありようを作り変えていくことが、先ほど言及した「社会的孤立」というテーマとの関連を含めて課題になってくる。

「コミュニティ空間」としての都市

居場所という話題について述べたが、こうした視点を踏まえると、都市あるいは街の空間というものを、人間がくつろぎやすい「コミュニティ空間」としてとらえるという発想が非常に重要になるだろう。

イントロダクションでもふれたように、私はアメリカに3年ほど滞在したことがあるが、残念ながら日本とアメリカは、悪い面がよく似ているというのが実際に、それは都市のありようが圧倒的に“生産者”中心であり、しかも“自動車中心”ということである。

そして私はある時期から、成熟社会の姿としては、ヨーロッパの街の姿のほうがはるかに生活の質が高いということを実感するようになった。一般に、ヨーロッパの都市では、高齢者、あるいは高齢者に限らず様々な人々が、ごく自然に市場やカフェなどでゆっくり過ごす姿が見られる。先ほどの「居場所」というテーマともつながるが、そうした場所が街の中にあるのは、ある意味で、医療施設や福祉施設を作るより重要な意味をもつことがあるのではないか。したがって、やや硬い言い方をするならば「都市政策と福祉政策の統合」、つまりまちづくりや都市政策と福祉政策をつないでいくという発想が求められているのではないか。

設問 1 日本社会あるいは日本人の関係性の特徴について 100～150 字程度で述べなさい。

設問 2 男性と女性の退職後の居場所の違いとその理由を 200 字程度で要約しなさい。

設問 3 筆者は新たな居場所づくりの重要性を述べている。本文最後の 1 文に記載されているような「まちづくりや都市政策と福祉政策をつないでいく発想」から、若者もしくは高齢者の新たな居場所をつくるために日本の地域が取り組めることについてあなたの考えを 500 字程度で説明しなさい。